

THE TOYO GAKUHO

THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT
OF THE TOYO BUNKO

Vol. 63, Nos. 3,4—March 1982

TDVİSAM
Kütüphanesi Arşivi
No 26.2613

Articles

- Katayama, T.: The *T'u-chia* System 閩甲制 in the Pearl River Delta in Kwangtung Province during the Ch'ing Period: land tax, household register and lineage 1
- Ochi, S.: On *Min-ch'ien* 緡錢 in the Han Period.....35
- Danjō, H.: The I-mên 義門 Chêng 鄭 Family and Society in the Late Yüan Dynasty.....67
- Kitada, H.: The Transition of Tidal Areas in the Chiangnan 江南 Delta of China..... 105
- Yamaguchi, Z.: Methods of Chronological Calculation in Tibetan Historical Sources..... 141

Reviews

- Yüan shih chi pei fang min tsu shih yen chiu chi kan (Öshima, R.)..... 169
- Chung kuo chin pa shih nien Ming shih lun chu mu lu (Yamane, Y.)..... 174
- Georgeon, F.: Aux origines du nationalisme turc, Yusuf Akçura (1876—1935) (Araï, M.)..... 177

Miscellanea

- Professor Walter Simon. An Obituary Notice (Enoki, K.)..... 186
- The Eighteenth Quriltai (Altaists' Meeting in Japan) (Okada, H.) 208
- The Sixth East Asian Altaistic Conference (Okada, H.)..... 214
- Contents of the *Hürriyet* (Liberty): a Young Ottoman newspaper published in London and Geneva between 1868 and 1870 (Araï, M.).....01

新オスマン人協会刊『自由』紙 (*Hürriyet*) 目録

— ロンドン, ジュネーヴ (1868—1870) —

Contents of the *Hürriyet* (Liberty):a Young Ottoman newspaper published in London and Geneva
between 1868 and 1870

新井政美

I. 研究の現状

1865年6月, Namık Kemal, Kayazade Reşat, Sağır Ahmet Bey-zade Mehmet, Menapirzade Nuri, Suphi Paşa-zade Ayetullah, Refik の6名によってイスタンブルに設立された新オスマン人協会 (Yeni Osmanlılar Cemiyeti) が, その後, 離合集散を繰り返しながら, 様々な新聞を発行して反専制運動を展開していったことは, よく知られている。しかし, 彼らによって刊行されたそれらの新聞については, 現在, 明らかにされていない点があまりに多いと言わねばならない。それどころか, 彼ら自身の行動や, その思想に関してさえも, 十分に研究されているとは言い難い状況にある。

新オスマン人協会については, その一員でもあったジャーナリスト, Ebüzziya Tevfik の回想録が, 第一級の史料として存在しているが⁽¹⁾, そこからさらに, 彼らひとりひとりの思想を分析, 検討する作業が, なかなかはかどっていない。文学史の立場からの, Ahmet Hamdi Tanpınar の仕事⁽²⁾, さらに, 政治学, 社会思想史の観点からの, Şerif Mardin, Hilmi Ziya Ülken のそれぞれの著作⁽³⁾ が代表的なものとしてあげられるが, いずれも, 特定の人物に的を絞ったものではない。

最も華々しい活動をし, またそれだけ著名な Namık Kemal については, Mithat Cemal Kuntay の三部作⁽⁴⁾をはじめ, Mehmet Kaplan の著作⁽⁵⁾など, 多くのものが出されていて, あたかも, 彼に関しては研究がされつくしたかの観すらある。しかし, 1967年から, アンカラの Fevziye Abdullah Tansel によって Kemal の書簡集が刊行され始めると⁽⁶⁾, イスタンブルの Ömer Faruk Akün は, その書簡集の誤りをただすだけで500ページを越すという大部の著作を (まだ Tansel による書簡集が完結しきらない) 1972年に上梓した⁽⁷⁾。Akün はその

後も Kemal の書簡の発掘に意欲を燃やしているように見うけられる⁽⁶⁾。これは何を意味するのであろうか。言うまでもなく、著作目録や、それにもとづく全集編纂といった、基礎的作業の欠落である。

Kemal の著作目録は、アンカラ大学言語・歴史・地理学部のスタッフによって出された、*Namık Kemal Hakkında* (『Namık Kemal について』) の中で、Şerif Hulûsi が、かなり精度の高いものを作成しているが⁽⁹⁾、それとても完璧とは言いがたい。全集刊行の試みは、早く、1910年に、*Külliyat-ı Kemal* (『Kemal 全集』) として始められたが、これも未完のままで終わってしまった⁽¹⁰⁾。こうした、目録・全集の編纂作業を滞らせている最大の原因は、専門の研究者による共同作業の欠如であると思われる。さらに今ひとつ、Kemal をはじめ、当時の人々の多くが、ここに紹介する *Hürriyet* などの新聞に、無署名で論説を書いていたことも挙げねばなるまい。したがって、そうした無署名論文の著者を確定するには、その著者の文体と思想とに相当通暁していることが必要となる。とは言っても、そこには当然読む側の主観が入り込み、研究者によって、その判断にかなりの差違が出てくることが考えられ、また、それだけに共同作業が必要になってくるのである。最も著名な Kemal についてすら、現状がこうであるならば、他は推して知るべしである。

一方、彼らの新聞についても、明らかにされていない部分がこれまた極めて多い。Kemal が中心となった、*Tasvir-i Efkâr* (『世論の叙述』)、*Hürriyet*、*İbret* (『警告』) などについては、前記の Kuntay や Kaplan らの著書の中でもかなり触れられているし、また、İhsan Sungu, Mustafa Nihat Özön による研究もみのがせない⁽¹¹⁾。さらに、Cavit Orhan Tütengil の仕事も重要なものであろう⁽¹²⁾。しかし、Kemal やその同志が、それらの新聞にどのような論説を書いていたのかという、具体的なことになる、皆目わからないのが現状である。Özön の著書が、*İbret* に発表された Kemal の論説の中から37篇を選んで、それを現代トルコ語に転写したにすぎないものであることに象徴されるように(もちろん、その仕事自体は大いに評価されるべきだが) 新聞の全容については、いまだ明らかにはされていないのである。まして、Kemal 以外の新オスマン人によって刊行された新聞については、Ali Suavi の *Muhbir* (『報道者』) や、*Ulûm* (『科学』) をはじめとして、その内容はほとんど明らかでない⁽¹³⁾。

まず、収集状況がよくないということが、研究の進展に大きな障害となっていることも事実である。しかし、*Hürriyet* 等、著名で、かつ、比較的収集状況のよいものについては、その都度図書館に行って読めばよいという考え方が、トルコ共和国の研究者を、目録の作成に向かわせない一因であるようにも思われる。そのことをとりたてて非難しようとは思わないが、しかし、とりわけ我々のよう

な外国人研究者にとっては、新聞の内容が目録の形にまとめられていることが、研究を進める上で、存外意味のあることではないかと考えた次第である。

II. *Hürriyet* について

1867年5月、イスタンブルを逃れてパリへ出た新オスマン人たちは、スルタン Abdülaziz がその年開かれた万国博覧会に出席するためにパリを訪問することになったため、早くも6月末にはフランスを退去しなければならなくなった。ナポレオン3世時代のフランスは、彼らにとっても決して自由な国ではなかったのである。彼らの第一外国語がフランス語であったにもかかわらず、彼らがその新聞をロンドンで刊行しはじめたことには、こうした背景があった。8月末に Ali Suavi が *Muhbir* を創刊したのに続き、Namık Kemal と Ziya Paşa とは、翌1868年6月29日に *Hürriyet* の第1号を刊行した。

発行所⁽¹⁴⁾は、Rupert Street 4番地である。これは、その後51号から St. Martin's Street 14番地に移り、さらに Rupert Street の27番地へ戻った後、89号から最後の100号までは、ジュネーヴの、恐らくは Corraterie 14番地を出されていった⁽¹⁵⁾。発行責任者として、4号まで Kayazade Reşat, 5号から63号まで Namık Kemal, それ以後は Mehmet Ârif の署名が、各号の末尾に付されている。63号までは、主として Kemal と Ziya Paşa とのふたりが中心となって執筆、編集を行っていたと言われる。しばしば現われる「……からの手紙」の中にも、実は彼らが自分で書いたものがあつたとも言われている⁽¹⁶⁾。64号からは、Ziya との意見の相違によって Kemal が離脱したため、Ziya がひとりで支えてゆくことになった(ただし、Ziya の名が責任者として表面に出ることはない)。88号までは活版印刷であるが、89号以後、つまりジュネーヴで出されたものは、すべて石版である。ほぼ19×30cmの紙面に2段組で、1号から10号までは4ページ、以後63号までは8ページを維持し、68, 69両号で8ページが復活された以外は、64号から100号まで、すべて4ページに縮小される。

巻頭、新聞名の下には次のような文言が記されている。「『新オスマン人協会』により、本紙は週一度発行される。そこに盛られるテーマは、オスマン国民と国家との救済と利益とに関する事柄であるから、東方諸地域の人々に無料で配布され、送料のみが実費負担である」

(“Yeni Osmanlılar Cem’iyyeti” tarafından işbu gazete haftada bir kerre neşredilir. Hâvî olduğu mebâhis millet ve devlet-i Osmâniyyenin selâmet ve menâfi’ine müteallik husûsât olmağla memâlik-i Şarkıyye ahâlîsine mec-cânen verilip yalnız posta ücreti alınır.)

Ziya Paşa の手になる、50号までの目録が、かなり粗雑なものではあるが、石版印刷で（したがって恐らくはジュネーヴで）作られており、コレクションによっては、それが付されたものもある。しかし、それ以後公刊された目録は存在しない。たまたまイスタンブルで入手する機会があった本紙を私蔵した責を、いく分なりとも果たしうるかとも思い、本紙の目録を公表しようと考えたのはこのためである。本来なら、い多少し詳細な内容の説明を付け加えるべきなのかもしれないが、それを含めた、本紙及び新オスマン人の思想の検討には、後の研鑽を期し、また俟つことにしたいと思う。

目録作成に際しては、はっきり「表題」と認められるものがある場合には、それを転写してカッコ内に日本語訳を付し、さらに、必要と思われる場合は、簡単な内容の説明を、一字下げて付けておいた。表題のないものについては、内容のみを一字下げて書くことにした。なお、転写は現代トルコ語に則しているが、できるだけ原文に忠実であることを心掛けた。したがって、hamza と 'ayn も、語頭を除いてすべて転写されている。また、アラビア語のものには、*印を付して示した。

註

- (1) *Yeni Tasvir-i Efkâr* の第1号（1909年5月31日）から464号（1911年1月7日）まで、317回にわたって連載された。タイトルは、11回までが、*Yeni Osmanlıların Sebeb-i Zuhuru*, 12回から20回までが、*Yeni Osmanlılar*, その後は *Yeni Osmanlılar Tarihi* となっている。なお、これを現代トルコ語に翻訳したものとして、著者の孫にあたる Ziyad Ebüzziya の *Yeni Osmanlılar Tarihi* (İstanbul, 1973-1974) と、Şemsettin Kutlu の同名の書 (İstanbul, 1973) とがある。
- (2) Ahmet Hamdi Tanpınar, *XIX. Asir Türk Edebiyatı Tarihi*. rev. ed., İstanbul, 1956.
- (3) Şerif Mardin, *The Genesis of Young Ottoman Thought*. Princeton, 1962. Hilmi Ziya Ülken, *Türkiye'de Çağdaş Düşünce Tarihi*. Konya, 1966.
- (4) Mithat Cemal Kuntay, *Namık Kemal*. 3vols., İstanbul, 1944-1956.
- (5) Mehmet Kaplan, *Namık Kemal, Hayatı ve Eserleri*. İstanbul, 1948.
- (6) Fevziye Abdullah Tansel (ed.), *Namık Kemal'in Husûsi Mektupları*. 3vols., Ankara, 1967-1973.
- (7) Ömer Faruk Akün, *Nâmık Kemal'in Mektupları*. İstanbul, 1972.
- (8) その最も新しい成果が、Akün, "Nâmık Kemal ile Süleyman Paşa'nın Bağdad Sürgünlüğü Sırasında İlk Mektuplaşmaları," *İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Türk Dili ve Edebiyatı Dergisi*, XXIII, 1981, pp. 1-36. である。
- (9) Şerif Hulûsi, "Namık Kemal'in Eserleri," in *Namık Kemal Hakkında*.

- İstanbul, 1942, pp. 303-421.
- (10) *Külliyyât-ı Kemâl*. İstanbul, 1326-1327. この時刊行されたのは、*Renan Müdâfa'anâmesi, Osmanlı Târîhi, Makâlât-ı Siyasiyye ve Edebiyye* である。
 - (11) İhsan Sungu, "Tanzimat ve Yeni Osmanlılar," in *Tanzimat*. I, İstanbul, 1940, pp. 777-857. Mustafa Nihat Özön, *Namık Kemal ve İbret Gazetesi*. İstanbul, 1938.
 - (12) Cavit Orhan Tütengil, "*Yeni Osmanlılar*" dan Bu Yana İngiltere'de *Türk Gazeteciliği*. İstanbul, 1969.
 - (13) もちろん, Mithat Cemal Kuntay, *Sarıklı İhtilalcı, Ali Suavi*. İstanbul, 1946. や Falih Rıfki Atay, *Başveren İnkılâpçı*. n.p., n.d. などの Suavi の評伝の中で、それらについて触れられてはいる。
 - (14) 新聞には、Imprimerie Centrale de la JEUNE TURQUIE と記されている。紙名の訳として、*la Liberté* が採用されているのを初めとして、日付などすべてフランス語である。
 - (15) 発行所としてこの番地がしるされているわけではない。しかし、89号以後、情報の送り先として新聞の末尾に付された宛先のうち、99号（つまり終刊の1号前）まで残るのは、このみである。したがって、それを一応発行所と考えてもさしつかえないのではなからうか。
 - (16) こうしたことや、また、多くの人が寄稿しているように見せかけるために、ひとりの執筆者が（それは主として創刊者やその協力者である）いくつもの筆名を用いて書くことが、この時代しばしば行なわれた。

号数・年月日	表 題 及 び 内 容	ページ
1号 1868年 6月29日	① *Hıbbu al-waṭāni min al-imāni (祖国愛は信仰から生れる) 『自由』紙創刊の目的と新オスマン人協会の活動方針について	1
	② *al-Haṣṣu ya'lū walā yu'lā 'alayhi (権利は至高でありそれを上回るものはない) 国家会議 (Şura-yı Devlet) 開会に際して公布された勅書に関して	2
2号 1868年 7月6日	① 勅書に関する前号の論説の続き	1
	② 『自由』紙創刊に際して Ziya Paşa の寄せた祝詞	2
	③ Ziya Paşa の祝詞に対するコメント——議会制を要求する新オスマン人の宣言——	4
	① Yeni Osmanlılar ve Bâb-ı Âlî	1

3号 1868年 7月13日	(新オスマン人とオスマン政府)	
	② 国家会議及び民事法廷の構成員任命について	3
	③ 『自由』紙刊行に対する Namik Kemal の賛同と決意の文	4
	④ Hâtırâ (回想)	4
4号 1868年 7月20日	① *Wa shâwirhum fi al-amri (命令に関して彼らと相談せよ) 専制政治に対する理論的な批判, 議会政治の要求	1
	② オスマン政府が行なう新たな借款に対する警告	4
	③ 『自由』紙創刊に関する Sağır Ahmed Bey-zade Mehmed Bey の覚書	4
	④ ロンドンで新たに創刊された『クレタ』(Girid)紙について	4
5号 1868年 7月27日	① Türkistan'ın esbâb-ı tedennîsi (オスマン帝国衰退の諸原因)	1
	② イスタンブルで政治的理由により教師が逮捕されたことについて	3
	③ 『自由』紙の発行責任者の署名変更について	4
6号 1868年 8月3日	① Devlet-i Âliyye'ye bâis-i tenezzül olan ma'ârifin esbâb-ı tedennîsi (オスマン国家衰退の原因である教育の荒廃の諸原因)	1
	② İstanbul muhâbirlerimizin birinden vârid olan mektub, fi 2 Rebî'ül-âhir (イスタンブルにいる我々の記者の一人から届いた7月23日付の手紙)	3
	③ 外国人への不動産所有権賦与法について	4
	④ 『自由』紙創刊を祝してくれた人々への感謝	4
7号 1868年 8月10日	① オスマン帝国の農業, 工業, 及び商業の現状について	1
	② 官報 (Takvim-i Vekayi) の改革について	4
	③ İstanbul'dan mektub, fi 9 Rebî'ül-âhir (7月30日付のイスタンブルからの手紙)	4
8号 1868年	① Mülkümüzün servetine dâ'ir geçen numaradaki makaleye zeyl (我が国の富に関する前号の論文の続き)	1

8月17日	② İstanbul'dan mektub, fi 17 Rebî'ül-âhir (8月7日付のイスタンブルからの手紙)	4
	③ 『自由』紙の配布について	4
9号 1868年 8月24日	① Devlet-i Âliyye'yi bulduğu hâl-i hatarnâktan halâsın esbâbı (オスマン国家を現在の危機的状況から救い出す方法)	1
	② "Constitutionnel" 紙 8月22日号の記事について	3
	③ İstanbul'dan mektub, fi 28 Rebî'ül-âhir (8月18日付のイスタンブルからの手紙)	4
10号 1868年 8月31日	① Sekizinci numaramızdaki mâliyye bendine zeyl (第9号における経済に関する論説の続き)	1
	② İstanbul'dan mektub, fi 5 Cemâzi'ül-âvvelî (8月24日付のイスタンブルからの手紙)	3
	③ "Levant Herald" 紙についての論評	4
	④ Dâvud Paşa のヨーロッパ訪問について	4
	⑤ ロシアの政情と, その反オスマン宣伝工作について	4
11号 1868年 9月7日	① 91名の署名でイスタンブルから『自由』紙に送られた祝詞	1
	② Yaşasın Yeni Osmanlılar (新オスマン人万歳)	3
	③ İ'lân (通知) …… [以下, この訳は省略 (訳者)] 『自由』紙, 及び新オスマン人協会の刊行物の購読法について	4
	④ Şi'r ve inşâ (詩と散文)	4
	⑤ 新オスマン人の活動に対するオスマン政府の対応に関して	7
	⑥ ロンドンにおける運転手のストライキについて	8
12号 1868年 9月14日	① 外国郵便局制度について	1
	② イギリス人から届いたクレタ問題に関連した手紙とそれへの回答	3
	③ ギリシアとプロイセンとに関する情報	3
	④ İstanbul'dan mektub, fi 15 Cemâzi'ül-âvvelî (9月1日付のイスタンブルからの手紙)	3
	⑤ Girid mes'elesi, Rusya politikası (クレタ問題, ロシアの政策)	4

	⑥ 議会制についての第4号の論説に対する批判への回答	5
	⑦ イギリス女王のフランス訪問について	8
	⑧ İ'lân 『自由』紙、及び新オスマン人協会の刊行物の購読法について	8
13号 1868年 9月21日	① *Kullkum râ'in wa kullkum mas'ûlun 'an ra'iyatihi (お前たちは皆牧夫であり、家畜について責任を持っている) オスマン国家の統治に関する論説	1
	② İstanbul'da bulunan muhâbirlerimizden birinden tahrirât, fî 24 Cemâzi'ül-âhira (イスタンブルにいる我々の記者の一人からの9月12日付の特報)	4
	③ ヨーロッパの親土的な学者から寄せられた手紙とそれへの論評	5
	④ Usûl-i meşverete dâ'ir geçenki nüshada yazılan mektubun ikincisi (議会制について前号で書かれた手紙の第2)	6
	⑤ オスマン政府の国庫収支表公表について	8
14号 1868年 9月29日 (マ)	① Avrupa'nın ahvâl-i hâzırası (ヨーロッパの現状)	1
	② Bulgâr hükûmeti (ブルガリアの政府)	3
	③ Usûl-i meşverete dâ'ir geçen numaralarda münderic mektubların üçüncüsü (議会制について先の号に掲載された手紙の第3)	5
15号 1868年 10月5日	① Mes'ele-i müsâvât (平等の問題) オスマン帝国全住民の平等に関するオスマン政府の政策について	1
	② İspanya'nın bugünkü hâli (スペインの現状)	6
	③ Yeni gelen haberler (新着の情報) スペインの内乱について	7
	④ Fuad Paşa の辞任に関する "la Liberté" 紙の報道	7

	⑤ İstanbul'dan tahrirât, fî 5 Cemâzi'ül-âhire (9月23日付のイスタンブルからの特報)	7
	⑥ İ'lân 『自由』紙の購読法について	8
16号 1868年 10月12日	① Yeni Osmanlıların i'lân-ı resmîsi (新オスマン人の公式宣言) ロシアの手先だとする新オスマン人への中傷について	1
	② Memleketeyn ahvâli (ワラキア、モルダヴィアの状況)	3
	③ İstanbul'dan tahrirât, fî 9 Cemâzi'ül-âhire (9月27日付のイスタンブルからの特報)	4
	④ Diğer mektub, fî 13 Cemâzi'ül-âhire (10月1日付のもう一つの手紙)	4
	⑤ Girid'den tahrirât, fî 11 Cemâzi'ül-âhire (9月29日付のクレタからの特報)	6
	⑥ 大宰相と外務大臣との辞任について	6
	⑦ Usûl-i meşverete dâ'ir geçen numaralarda münderic mektubların dördüncüsü (議会制について先の号に掲載された手紙の第4)	7
	⑧ セルビアの法廷に対するオーストリア、ロシアの干渉の排除について	8
	⑨ 新オスマン人の出版活動について	8
	⑩ クリミア戦争の戦後処理について	8
17号 1868年 10月19日	① Çerkes muhâcirleri (チェルケス人移民)	1
	② İstanbul'dan mektub, fî 25 Cemâzi'ül-âhire (10月13日付のイスタンブルからの手紙)	4
	③ Diğer mektub, fî 23 Cemâzi'ül-âhire (10月11日付のもう一つの手紙)	6
	④ Girid'den tahrirât, fî 13 Cemâzi'ül-âhire (10月1日付のクレタからの特報)	6
	⑤ Usûl-i meşverete dâ'ir geçen numaralarda münderic mektubların beşinci (議会制について先の号に掲載された手紙の第5)	6
	⑥ İhtâr (通告)	8

	イスタンブルにおける記者達がそれぞれ個別に行動していることと、それにとりなり情報の差異とについて	8
	⑦ İ'ân 新オスマン人の出版活動について	8
18号 1868年 10月26日	① イスタンブルにおける容疑者の取り扱いに関して	1
	② İstanbul'da bulunan muhâbirlerimizden birinden birinci mektub, fî 14 Cemâzi'ül-âhire (イスタンブルにいる我々の記者の一人からの10月2日付の第1の手紙)	2
	③ İstanbul'dan diğ'er mektub, fî 25 Cemâzi'ül-âhire (10月13日付のイスタンブルからのもう一つの手紙)	4
	④ エジプトの情勢について	6
	⑤ Usûl-i meşverete dâ'ir geçen numaralarda münderic mektubların altıncısı (議会制について先の号に掲載された手紙の第6)	6
19号 1868年 11月2日	① オスマン帝国の政治及び教育の現状について	1
	② "International" 紙の Âlî Paşa, Fuad Paşa に関する記事について	7
	③ Girit'den tahrirât, fî 22 Cemâzi'ül-âhire (10月10日付のクレタからの特報)	7
	④ İzmir'den mektub, fî 23 Cemâzi'ül-âhire (10月11日付のイズミルからの手紙)	8
20号 1868年 11月9日	① Memâlik-i Osmâniyye'nin yeni mukâsemesi (オスマン国家の新たな分割) オスマン帝国分割を図るヨーロッパ諸国の動きについて	1
	② インド駐在のイギリス武官による汎イスラム、反帝国主義運動に関する報告 ("la Liberté" 紙掲載) について	5
	③ İstanbul'dan mektub, fî 5 Receb (10月22日付のイスタンブルからの手紙)	6
	④ Girit'den tahrirât, fî 3 Receb (10月20日付のクレタからの特報)	6
	⑤ Usûl-i meşverete dâ'ir geçen numaralarda münderic mektubların yedincisi (議会制について先の号に掲載された手紙の第7)	8

	⑥ İ'ân 新オスマン人の出版活動について	8
	⑦ クリミア戦争の戦後処理について	8
21号 1868年 11月16日	① Bâb-ı Âlî'nin akdedeceđi istikrâzî ümmet-i Osmâniyyenin kabûl etmeyeceđini hâvî İstanbul'dan yüz iki imzâ ile aldığımız protestonâme (オスマン政府が結ぶことになっている借款契約をオスマン社会が認めないことをした、102名の署名入りのイスタンブルからの抗議書)	1
	② Ecnebîlerin tasarruf-ı emlak salâhiyyeti (外国人の不動産所有権)	2
	③ İstanbul'dan mektub, fî 15 Receb (11月1日付のイスタンブルからの手紙)	5
	④ İstanbul'dan diğ'er mektub, fî 21 Receb (11月7日付のイスタンブルからのもう一つの手紙)	6
	⑤ Niş'ten tahrirât, fî 8 Receb (10月25日付のニシュからの特報)	8
	22号 1868年 11月23日	① İstikrâz-i cedîd üzerine Yeni Osmanlılar Cem'iyyeti'nin mütâla'âtı (新たな借款についての新オスマン人協会の見解)
② Girit'den tahrirât, fî 29 Receb (11月15日付のクレタからの特報)		6
③ Usûl-i meşverete dâ'ir geçen numaralarda münderic mektubların nihâyeti (議会制について先の号に掲載された手紙の最終回)		6
④ Girit'de bulunan ahbâbımızın birinden mektub, fî gurre-i Şa'bân (クレタにいる我々の友人の一人からの11月17日付の手紙)		8
23号 1868年 11月30日	① オスマン帝国の領土保全、内政不干渉をうたったイギリス外相 Stanley の演説について	1
	② Fetânetine i'timâd ettiğimiz bir zat tarafından İstanbul'dan aldığımız birinci mektub, fî 2 Şa'bân (その知性に我々が信をおくイスタンブルのある人から我々が受け取った11月18日付の第1の手紙)	5
	③ İstanbul'dan mektub, fî 23 Receb (11月9日付のイスタンブルからの手紙)	7

	④ ワラキア, モルダヴィアの盗賊団について	8
	⑤ ロシアの外交政策と, それへの西欧諸国の対応について	8
	⑥ Reşid Paşa の覚書の新オスマン人協会による 刊行について	8
	① Hasta âdam (病める者) オスマン帝国の現状	1
24号 1868年 12月7日	② Yine Girid mes'elesi tâzelendi (クレタ問題再燃す)	2
	③ İstanbul'dan mektub, fî 3 Şa'bân (11月19日付のイスタンブルからの手紙)	4
	④ Avrupa Şark'ın âsâyişini ister (ヨーロッパは東方の安定を望む)	5
	⑤ Stanley 外相の演説に関する "Finance" 紙の論説について	8
	① Bizde âdam yetişmiyor (我が国では人材が育たない) オスマン帝国における教育の実状について	1
25号 1868年 12月14日	② İstanbul'dan mektub, fî 13 Şa'bân (11月29日付のイスタンブルからの手紙)	2
	③ "Terakki" 紙の外交に関する記事への批判	4
	④ 回想録の掲載に関して	5
	⑤ Hâtıra-ı evvelî (第1の回想) オスマン帝国衰退の原因等について	5
	⑥ クリミア戦争の戦後処理について	8
	① Yaşasın Abdülazîz Hân...Âferîn Bâb-ı Âlî (万歳アブデュルアズィズ陛下...天晴れオスマン政府)	1
26号 1868年 12月21日	② オスマン帝国とギリシアとの国交断絶について	3
	③ İstanbul vergisi (イスタンブルの税金) 政府の課税案とオスマン帝国の財政とについて	4
	① Yunan mes'elesi (ギリシア問題)	1
27号 1868年	② "Muhbir" 紙休刊について	5
	③ İdâre-i hâziranın hulâsa-i âsâri	5

12月28日	(現政権の略歴)	
	④ İstanbul'dan mektub, fî 23 Şa'bân (12月7日付のイスタンブルからの手紙)	7
	⑤ "Terakki" 紙の Hasan 大佐の裁判に関する記事について	8
	① İstanbul'dan mektub, fî 4 Ramazân (12月19日付のイスタンブルからの手紙)	1
28号 1869年 1月4日	② İstanbul'dan diğer mektub, fî 4 Ramazân (12月19日付のイスタンブルからのもう一つの手紙)	3
	③ ギリシア問題に関する "el-Cevâib" 紙の論説について	3
	④ Yirmi beşinci numarada olan hâtıraya zeyl (25号における回想の続き)	4
	① ギリシア問題に関する論評	1
	② İstanbul'dan mektub, fî 15 Ramazân (12月30日付のイスタンブルからの手紙)	4
29号 1869年 1月11日	③ ギリシア政府から送られた最後通告について	5
	④ モンテネグロ王子のペテルブルク訪問について	7
	⑤ エジプト船の沈没について	7
	⑥ Bir zatın Paris'ten gönderdiği varaka (パリから送られたある人の覚書)	8
	⑦ ギリシア問題についての情報	8
	⑧ Dâvud Paşa のヨーロッパ再訪について	8
	① *Inallâha ya'muru bi al-'adli wa al-ihsâni (たしかに正義と善とを神も命じる) イスラム法を捨て西洋の法律を採用した Tanzimat に対する批判	1
30号 1869年 1月18日	② Muhtıra (覚え書き) 新オスマン人の活動とそれに対する政府の妨害とについて	8
	③ フランスの諸新聞のオスマン帝国に関する報道について	8
	④ ギリシア問題についての情報	8
	① ブハラ占領を機にカーブルのアミール, Abdurrahman がインドのイギリス政庁に於てた手紙	1
	② İstanbul'dan mektub, fî 23 Ramazân	2

31号 1869年 1月25日	(1月7日付のイスタンブルからの手紙)	4	
	③ İstanbul'dan diğer mektub, fî 26 Ramazân (1月10日付のイスタンブルからのもう一つの手紙)	5	
	④ İzmir'den mektub, fî 15 Ramazân (12月30日付のイズミルからの手紙)	6	
	⑤ Trablusgarb'dan mektub, fî 1 Kânûn-ı sâni (1月1日付のトリポリからの手紙)	7	
	⑥ ギリシア問題について	8	
	⑦ “Terakki” 紙に関して3題	8	
	⑧ “Rûznâme-i Ceride-i Havâdis” 紙のワラキア, モルダヴィアに関する記事について	8	
	⑨ “Mir'at” 紙の編輯方針について	8	
	32号 1869年 2月1日	① カーブルのアミール Abdurrahman の手紙に関する論評	1
		② イスタンブルの諸新聞について	7
③ “Takvim-i Vekayi” 1月1日号掲載の法令への抗議		7	
33号 1869年 2月8日	① Konferansın karârı (会議の決定事項) トルコ=ギリシア問題に関する列国のパリ会議について	1	
	② Umûr-i Nâfia Nâzırı Dâvud Paşa'nın Viyana'da akdedeceği istikrâz (公共事業相 Dâvud Paşaが、ウィーンで締結する借款)	2	
	③ İstanbul'dan mektub, fî 13 Şevvâl (1月27日付のイスタンブルからの手紙)	4	
	④ İstanbul'dan diğer mektub, fî 4 Şevvâl (1月18日付のイスタンブルからのもう一つの手紙)	6	
	⑤ Subhi Bey の国家会議からの辞任について	6	
	⑥ Terakki'de görülen fikra-i garîbe (Terakki に見られる奇妙な記事)	8	
34号 1869年	① 第28号に掲載された回想の続き	1	
	② İstanbul'dan mektub, fî 21 Şevvâl (2月4日付のイスタンブルからの手紙)	4	
	③ Sadık, Râşid, Mehmed efendi 達の追放について	6	
	④ Girid'den tahrirât, fî 20 Şevvâl (2月3日付のクレタからの特報)	7	

2月15日	⑤ Edirne'den mektub, fî 24 Şevvâl (2月7日付のエディルネからの手紙)	8	
	⑥ フランス=プロイセン関係について	8	
	⑦ Londra'da bir gazete'de görülen fikra (ロンドンの一新聞で見られた記事)	8	
	⑧ “Terakki” 紙の kırâathâne に関する記事について	8	
	35号 1869年 2月22日	① Karınca kanâtlandı (蟻が翔んだ) Fuad Paşa, Âli Paşa の推進してきた政策への批判	1
		② Fu'ad Paşa'nın vefâtı (ファト・パシャの逝去)	4
		③ Yeni mevkûfların tafsîl-i ahvâline dâ'ir İstanbul'dan beyânnâme (新たな罪人の状態の詳細に関するイスタンブルからの報告書)	4
	36号 1869年 3月1日	④ Vidin'den tahrirât, fî gurre-i Zi'l-ka'de (2月2日付のヴィディン(ブルガリア)からの特報)	6
⑤ A'zâr-ı mevhûme (架空の弁明) オスマン帝国衰退の原因を宗教の影響に帰す説への反論		7	
36号 1869年 3月1日	① ギリシア外相からフランス外相に送られた書簡	1	
	② Sadâret (大宰相職) オスマン帝国の政治体制について	1	
	③ モンテネグロ王子のロシア, プロイセン訪問について	3	
	④ イズミルの少年院と教育の問題とについて	4	
	⑤ ワラキア, モルダヴィア情勢について	5	
	⑥ ヨーロッパ列国会議について	5	
	⑦ İstanbul'dan mektub, fî 5 Zi'l-ka'de (2月17日付のイスタンブルからの手紙)	5	
	⑧ Hâtıra-i sâniyye (回想の第2) 34号の回想の続き	6	
	⑨ İhtâr (通知) 「回想」の誤植について	8	

	⑩	ギリシア問題以後のヨーロッパ情勢について	8
37号 1869年 3月8日	①	Hürriyyet (自由) 政治体制に関する論説	1
	②	İstanbul'dan mektub, fî 6 Zi'l-ka'de (2月18日付のイスタンブルからの手紙)	2
	③	エジプト統治に関して	3
	④	Hâtıraların mâba'di (回想の続き)	6
38号 1869年 3月15日	①	Yeni istikrâz (新たな借款)	1
	②	İstanbul'dan mektub, fî 14 Zi'l-ka'de (2月15日付のイスタンブルからの手紙)	2
	③	Rızkullah Hasun から送られたスパイ問題に関する手紙について	4
	④	Bir zatın mülâhazanâmesinden hulâsa (ある人物の意見書の要旨) オスマン帝国の非ムスリム住民問題に関して	5
	⑤	Girid'den tahrirât, fî 11 Zi'l-ka'de (2月12日付のクレタからの特報)	5
	⑥	追放された Sadık efendi に関する情報	6
	⑦	Hâtıraların mâba'di (回想の続き)	6
	⑧	イスタンブルにおける人事異動について	8
39号 1869年 3月22日	①	Tâbi'iyet-i Osmâniyye (オスマン臣民) 外国人の諸特権, 特に裁判への外国の介入について	1
	②	İstanbul'dan mektub, fî 19 Zi'l-ka'de (2月20日付のイスタンブルからの手紙)	3
	③	İstanbul'dan diğer mektub, fî 21 Zi'l-ka'de (2月22日付のイスタンブルからのもう一つの手紙)	4
	④	Taşradan düzde çâre kâbildir, hırsız evden olursa müşküldür (外から来る盗っ人は防げるが, 泥棒が家の中から出ては防ぐのは困難である) 非ムスリム従属民に関して	5
	⑤	Rızkullah Hasun からの手紙	7

	⑥	"Terakki", "Muhib" 両紙への官憲の介入について	8
	⑦	オスマン政府のとり決めた500万リラの借款に関する "Terakki" 紙の報道について	8
40号 1869年 3月29日	①	Es'ile-i muhtasıra (要約されたいくつかの質問) オスマン帝国の衰退の原因について	1
	②	Rızkullah Hasun からの手紙	2
	③	İstanbul'dan mektub, fî 3 Zi'l-hicce (3月6日付のイスタンブルからの手紙)	3
	④	Hanya'dan tahrirât, fî 21 Zi'l-ka'de (2月22日付のハニア (クレタ) からの特報)	5
	⑤	Kandiye'den tahrirât, fî 23 Zi'l-ka'de (2月24日付のカンディア (クレタ) からの特報)	5
	⑥	Bürhân-ı tecribî (経験的な議論) オスマン帝国の衰退と現状との告発	6
	⑦	Hâtıraların mâba'di (回想の続き)	7
41号 1869年 4月5日	①	*Zâda fi al-ṭanbūri naghmatan ukhrâ (タンブルを別の調子に高めた) 内務省 (Dahiliye Nezareti) の再編について	1
	②	İstanbul'dan mektub, fî 10 Zi'l-hicce (3月13日付のイスタンブルからの手紙)	3
	③	Kandiye'den tahrirât, fî 5 Zi'l-hicce (3月8日付のカンディアからの特報)	4
	④	Hâtıraların mâba'di (回想の続き)	5
	⑤	エジプトのヴァーリー, İsmail Paşa に関して	8
42号 1869年 4月12日	①	Vilâyet nizâmâtı (地方州法) Tanzimat 以後の地方行政について	1
	②	クレタ問題に関する Ali Suavi の論説について	5
	③	Reyb'ül-menûn (時の出来事) …… [以下, この訳は省略 (訳者)]	7
	④	Hâtıraların mâba'di (回想の続き)	7
	①	立憲政の採用に関する議論	1

43号 1869年 4月19日	② İstanbul'dan mektub (イスタンブルからの手紙)	4
	③ “Terakki” 紙についての論評	5
	④ Reyb'ül-menûn	7
44号 1869年 4月26日	① Hâriciyye nezâreti (外務省) オスマン帝国外務省の組織、活動、及び欠陥について	1
	② クレタ問題に関する情報	7
	③ İstanbul'dan mektub, fî 29 Zi'l-hicce (4月1日付のイスタンブルからの手紙)	7
	④ İstanbul'dan diğ̃er mektub, fî 28 Zi'l-hicce (3月31日付のイスタンブルからのもう一つの手紙)	8
	⑤ Âlî Paşa'nın tezkeresi (Âlî Paşa の覚え書き)	8
	⑥ Kânî Paşa'nın cevâbı (Kânî Paşa の回答)	8
45号 1869年 5月3日	① タンズィマート官僚、特に彼らが導入した裁判制度への批判	1
	② オスマン帝国の財政改革について	4
	③ Reyb'ül-menûn	6
	④ Hâtıraların mâba'di (回想の続き)	7
46号 1869年 5月10日	① ブハラ <small>の</small> 占領に関して	1
	② İstanbul'dan mektub, fî 15 Muharrem (4月17日付のイスタンブルからの手紙)	4
	③ İstanbul'dan diğ̃er mektub, fî 13 Muharrem (4月15日付のイスタンブルからのもう一つの手紙)	6
	④ Reyb'ül-menûn	8
47号 1869年 5月17日	① オスマン帝国の財政問題に関して	1
	② 財政問題に関する “Terakki” 紙の論説について	2
	③ Hâtıraların mâba'di (回想の続き)	3
	④ Reyb'ül-menûn	5
	⑤ 人間の自由を主張する新オスマン人の “Muhib” 紙への反論	7

48号 1869年 5月24日	① İbret (警告) オスマン政府批判	1
	② Mısır'dan tahrirât, fî 12 Muharrem (4月14日付のエジプトからの特報)	3
	③ İstanbul'dan mektub, fî 25 Muharrem (4月27日付のイスタンブルからの手紙)	5
	④ エルズルム街道建設に関連する情報	6
	⑤ Hâtıraların mâba'di (回想の続き)	7
49号 1869年 5月31日	① 年頭に際してスルタンに奏上された政府の政治方針への論評	1
	② エジプト・ヘディエーヴのヨーロッパ再訪に関して	6
	③ İstanbul'dan mektub, fî 25 Muharrem (4月27日付のイスタンブルからの手紙)	7
	④ İzmir'den tahrirât, fî 9 Mayıs (5月9日付のイズミルからの特報)	7
	⑤ “Muhib” 紙についての論評	8
	⑥ 新オスマン人の一員 Mehmed によりパリで創刊された “İttihad” 紙について	8
50号 1869年 6月7日	① İ'lân-ı mahsûs (特別な通知) 『自由』紙50号までのセット配布と購読の継続とについて	1
	② オスマン帝国における法体系の混乱等について	1
	③ İstanbul'dan mektub (イスタンブルからの手紙)	4
	④ Reyb'ül-menûn	8
51号 1869年 6月14日	① *İkhtilâfu ummatî rahmatun (わが共同体における様々な意見の存在は神の慈悲である) 衆議によって共同体の意志を決定することの正当性について	1
	② İstanbul'dan tahrirât, fî 20 Safer (5月22日付のイスタンブルからの特報)	4
	③ Reyb'ül-menûn	6
	④ ムダニヤ・クルシェヒール間の鉄道建設について	7

	⑤ İ'lân-ı mahsûs (特別な通知) 『自由』紙50号までのセット配布と購読の継続と について	8
	① *Adlu sâ'atin khayrun min 'ibâdati alfi sanatin (1時間の公正は千年の信仰に勝る) 公正な法による統治を求める論説	1
52号 1869年 6月21日	② Fransa ihtilâli (フランス革命) ③ Reyb'ül-menûn ④ "İstanbul" 紙の編輯方針に関して ⑤ İ'lân-ı mahsûs 『自由』紙の購読継続と50号までのセット配布とに ついて	4 6 7 8
53号 1869年 6月28日	① Hizmet-i askeriyye (兵役) ② İstanbul'dan tahrirât, fî 8 Reb'ül-evvel (6月8日付のイスタンブルからの特報) ③ Reyb'ül-menûn ④ İ'lân-ı mahsûs 『自由』紙の購読継続と50号までのセット配布とに ついて	1 5 8 8
54号 1869年 7月5日	① İ'lân-ı mahsûs 『自由』紙の送料, そこへの投稿等について ② オスマン帝国における外国特権の廃止, 教育制度の 改善について ③ Reyb'ül-menûn ④ İ'lân-ı mahsûs 『自由』紙の購読継続と50号までのセット配布とに ついて	1 2 6 8
55号 1869年 7月12日	① Tuz inhisârı (塩の専売) ② Reyb'ül-menûn ③ Hâturaların mâba'di (回想の続き) ④ İ'lân-ı mahsûs 『自由』紙の購読継続と50号までのセット配布とに ついて	1 4 6 8

	について	
56号 1869年 7月19日	① Mısır mes'elesi (エジプト問題) ② Bâb-ı Âlî'nin politikası (オスマン政府の政策) ③ İ'lân-ı mahsûs (特別な通知) 『自由』紙の購読継続と50号までのセット配布とに ついて	1 3 8
57号 1869年 7月26日	① エジプト問題について ② İstanbul'dan tahrirât, fî 25 Reb'ül-evvel (6月25日付のイスタンブルからの特報) ③ Reyb'ül-menûn ④ İ'lân-ı mahsûs 『自由』紙購読の継続と50号までのセット配布とに ついて	1 4 5 8
58号 1869年 8月2日	① Hürriyyet (自由) ② クレタ駐在軍人からの情報 ③ Hanya'dan diğer tahrirât, fî 17 Hazîrân (6月17日付のハニアからのもう一つの特報) ④ Selânik'ten tahrirât, fî 17 Reb'ül-âhir (7月17日付のサロニカからの特報) ⑤ İ'lân-ı mahsûs 『自由』紙の送料, そこへの投稿等について ⑥ İ'lân (通知) 『自由』紙の購読継続と50号までのセット配布とに ついて	1 2 5 6 7 8
59号 1869年 8月9日	① エジプト問題について ② 教育の普及に関するオスマン政府批判 ③ 新たに公布, 刊行された『民法典』(Mecelle-i Ah- kâm-ı Adliyye) について ④ Reyb'ül-menûn ⑤ 教育と文字の問題に関する Malkom Han からの意 見書 ⑥ İ'lân	1 5 6 7 7 8

	『自由』紙の購読継続と50号までのセット配布とについて	
60号 1869年 8月16日	① ナポレオン3世とその政治とに関して	1
	② エジプト問題について	2
	③ İstanbul'dan tahrirât, fî 25 Rebî'ül-âhir (7月25日付のイスタンブルからの特報)	5
	④ Reyb'ül-menûn	7
	⑤ 外交問題についての“la Turquie”紙の記事に関して	8
	⑥ ヴェールに関する“Terakki”紙の記事について	8
61号 1869年 8月23日	① 文字改革の問題について	1
	② İstanbul'dan tahrirât, fî 25 Rebî'ül-âhir (7月25日付のイスタンブルからの特報)	5
	③ İ'lân 『自由』紙の購読継続と50号までのセット配布とについて	7
	④ İ'lân-ı mahsûs 『自由』紙の送料とそれへの投稿について	8
62号 1869年 8月30日	① Muvâzene-i mâliyye (財政のバランス) オスマン帝国財政の検討	1
	② エジプトの知事へ渡された書簡に対する回答について	4
	③ 55号に掲載された回想の続き	6
63号 1869年 9月6日	① Muvâzene-i mâliyye 2 (財政のバランス 2)	1
	② エジプト知事からオスマン政府への書簡について	5
	③ Reyb'ül-menûn	6
	④ イスタンブルにおける鉄道建設に関する逸話	7
	⑤ İzmir'den mektub, fî 11 Cemâzi'ül-âhîr (8月9日付のイズミルからの手紙)	7
	⑥ İ'lân-ı mahsûs 『自由』紙の購読方法について	7
64号 1869年	① Evzâ-ı şütiürgürbe (混乱した状態) 教育問題と市内郵便制度とについて	1
	② İstanbul'dan tahrirât, fî 17 Cemâzi'ül-âhîr	3

9月13日	(8月15日付のイスタンブルからの特報)	
65号 1869年 9月20日	① İ'tirâz (通告) 『自由』紙が減頁を余儀なくされたことについて	1
	② Müslümanlardan da Protestan olmağa başladılar (ムスリムもプロテスタントに改宗しはじめた) イスタンブルにおける改宗事件について	1
	③ クレタ駐在の軍人からの情報	3
	④ 『自由』紙の購読法について	4
66号 1869年 9月27日	① Özgürlük (ダチョウの失敗) 多くの法令が出されても、それがきちんと実施されていない現状への批判	1
	② 65号掲載のクレタ情報の続き	4
67号 1869年 10月4日	① Yine Mısır mes'elesi (再びエジプト問題)	1
	② İstanbul'dan tahrirât, fî 8 Cemâzi'ül-âhîre (9月5日付のイスタンブルからの特報)	1
	③ İstanbul'dan diğerk tahrirât, fî 11 Cemâzi'ül-âhîre (9月8日付のイスタンブルからのもう一つの特報)	3
68号 1869年 10月11日	① Sultân Abdülazîz Hân, Ziyâ Bey, Âlî Paşa (スルタン・アブデュルアズィズ、ズィヤ・ベイ、アリー・パシャ)	1
	② İstanbul'dan mektub, fî 22 Cemâzi'ül-âhîre (9月19日付のイスタンブルからの手紙)	7
69号 1869年 10月18日	① Sultân Abdülazîz Hân, Ziyâ Bey, Âlî Paşa	1
	② Mekke-i mükerrreme'den tahrirât, fî 1 Cemâzi'ül-âhîr (7月30日付のメッカからの特報)	7
	③ Reyb'ül-menûn	8
70号 1869年 10月25日	① İstanbul'dan mektub, fî 7 Receb (10月2日付のイスタンブルからの手紙)	1
	② Reyb'ül-menûn	3
71号	① Fu'ad Paşa'nın vasiyyetnâmesi (Fuad Paşa の遺言状)	1
	② Rusçuk'tan bir muharrerât, fî 24 Eylûl	2

彙報新井	1869年 11月1日	(9月24日付のルスチュクからの通信)	
		③ Reyb'ül-menûn	3
		④ İsmail Bey の Varna 知事就任について	4
	72号 1869年 11月8日	① İstanbul'dan tahrirât, fî 14 Receb (10月10日付のイスタンブルからの特報)	1
		② İstanbul'dan diğer mektub, fî 23 Receb (10月19日付のイスタンブルからのもう一つの手紙)	3
		③ Reyb'ül-menûn	4
	73号 1869年 11月15日	① İ'lân 『自由』紙の購読法について	1
		② Mısır mes'elesinde kim kazandı (エジプト問題で利益を得たのは誰か)	1
		③ Reyb'ül-menûn	4
	74号 1869年 11月22日	① İstanbul'dan tahrirât, fî 23 Receb (10月19日付のイスタンブルからの特報)	1
		② Reyb'ül-menûn	4
		③ Havâdis-i mühimme (重要な情報) エジプト問題に関して	4
	75号 1869年 11月29日	① Bir zat tarafından mektub, fî 3 Şa'bân (10月29日付のある人物からの手紙)	1
		② Reyb'ül-menûn	3
76号 1869年 12月6日	① Devlet-i Âliyye'ye Mısır eyâleti mi lâzım yoksa Âlî Paşa mı (オスマン国家にエジプト州が必要なのか、それとも Âlî Paşa が必要なのか)	1	
	② Tarnoy'dan mektub, fî 6 Teşrin-i sâni (11月6日付のタルノイからの手紙)	3	
	③ Reyb'ül-menûn	4	
77号 1869年 12月13日	① İ'lân 『自由』紙発行所の移転について	1	
	② エジプト問題に関する諸新聞の議論について	1	
	③ Reyb'ül-menûn	2	
78号	① İ'lân 『自由』紙発行所の移転について	1	
	② Su'avî Efendi tarafından gelen mektub sûreti, fî 7	1	

1869年 12月20日	Ramazân (Suavi Efendi からの12月1日付の手紙の文面)	
	③ İstanbul'dan mektub, fî 28 Şa'bân (11月23日付のイスタンブルからの手紙)	3
79号 1869年 12月27日	① Mısır mes'elesi yoluna girdi (エジプト問題落ち着く)	1
	② İstanbul'dan mektub, fî 12 Ramazân (12月6日付のイスタンブルからの手紙)	2
	③ Reyb'ül-menûn	3
	④ İ'lân 『自由』紙発行所の移転について	4
80号 1870年 1月3日	① İki mes'ele-i mühimme (二つの重要な問題) Abdülazîz と Âlî Paşa について	1
	② イスタンブルにおける人事に関して	4
81号 1870年 1月10日	① İki mes'ele-i mühimme'nin mâba'di (「二つの重要な問題」の続き)	1
	② Reyb'ül-menûn	4
82号 1870年 1月17日	① İki mes'ele-i mühimme'nin mâba'di (「二つの重要な問題」の続き)	1
	② İstanbul'dan mektub, fî 27 Ramazân (12月21日付のイスタンブルからの手紙)	3
	③ İ'lân 『自由』紙発行所の移転について	4
83号 1870年 1月24日	① İki mes'ele-i mühimme'nin mâba'di (「二つの重要な問題」の続き)	1
	② İstanbul'dan muharrerât, fî 3 Şevvâl (12月27日付のイスタンブルからの通信)	3
84号 1870年 1月31日	① İ'lân Ali Suavi の “Ulâm” 紙購読について	1
	② İki mes'ele-i mühimme'nin mâba'di (「二つの重要な問題」の続き)	1
	③ Reyb'ül-menûn	4
85号 1870年	① Hukuk ve muhâkim (法と諸法廷)	1
	② İstanbul'dan tahrirât, fî 25 Şevvâl	3

2月7日	(1月18日付のイスタンブルからの特報)	
86号 1870年 2月14日	① Hukuk ve muhâkim bendinin mâba'di (「法と諸法廷」の続き)	1
87号 1870年 2月21日	① Hakâyık-ı mes'ele-i Mısriyye (エジプト問題の真実)	1
88号 1870年 2月28日	① Hakâyık-ı mes'ele-i Mısriyye bendinin bakıyyesi (「エジプト問題の真実」の残り) ② Reyb'ül-menûn	1 4
89号 1870年 4月3日	① Hürriyet'in sebab-i tehhürü (『自由』紙の刊行が滞った理由) ② İstanbul'dan mektub, fî 17 Zi'l-hicce (3月10日付のイスタンブルからの手紙)	1 4
90号 1870年 4月10日	① Nüsha-i sâbıkada münderic İstanbul mektubunun mâba'di (前号掲載のイスタンブルからの手紙の続き) ② 25 Zi'l-hicce târihiyle İstanbul'dan diğer mektub (3月18日付のイスタンブルからのもう一つの手紙) ③ İ'lân 『自由』紙の発行所移転ともなる情報の送り先の 変更について	1 3 4
91号 1870年 4月17日	① Yine fî istikrâz (再び借款について) ② İstanbul'dan tahrirât, fî 29 Zi'l-hicce (3月22日付のイスタンブルからの特報) ③ 『自由』紙の発行所移転ともなる情報の送り先の 変更について	1 2 4
92号 1870年 4月24日	① Memleketeyn ve Karadağ ahvâli (ワラキア、モルダヴィアとモンテネグロとの情勢) ② Reyb'ül-menûn ③ Nüsha-i sâbıkada münderic İstanbul mektubunun bakıyyesi (前号掲載のイスタンブルからの手紙の残り) ④ İ'lân 『自由』紙の発行所移転ともなる情報の送り先の 変更について	1 2 3 4

93号 1870年 5月1日	① Fransa'nın buhrânı (フランスの危機)	1
94号 1870年 5月7日	① İnkılâb (革命) Hüseyn Vasfî がジュネーブで創刊した “İnkılâb” 紙について ② İ'lân 『自由』紙の発行所移転ともなる情報の送り先の 変更について	1 4
95号 1870年 5月14日	① Nutk-ı hümâyûn üzerine mütâla'ât (勅語に関する論評) ② Safer 7 târihiyle İstanbul'dan tahrirât (4月28日付のイスタンブルからの特報) ③ İ'lân 『自由』紙の発行所移転とそれともなる情報の送り 先の変更について	1 3 4
96号 1870年 5月24日	① *Nâşihun ghayru muntaşihin (助言するべき相手のいない助言者) オスマン政府の望む借款、及びオスマン政府とエジ プトとの財政の比較 ② Reyb'ül-menûn ③ İ'lân 『自由』紙終刊の予告と、セット販売とについて	1 3 4
97号 1870年 5月31日	① Safer 22 târihiyle İstanbul'dan tahrirât (5月13日付のイスタンブルからの特報) ② Reyb'ül-menûn ③ İ'lân 『自由』紙終刊の予告と、セット販売とについて	1 3 4
98号 1870年 6月6日	① İmtiyâzât-ı ecnebiyye (外国人の特権) ② Safer 27 târihiyle İstanbul'dan mektub (5月18日付のイスタンブルからの手紙) ③ İ'lân 『自由』紙終刊の予告とセット販売とについて	1 3 4
	① İdâre-i cumhûriyye ile hükûmet-i şahsiyyenin farkı (共和政と独裁との違い)	1

99号 1870年 6月14日	② 7 Reb'ül-evvel târihiyle İstanbul'dan mektub (5月27日付のイスタンブルからの手紙)	3
	③ İ'lân 『自由』紙終刊の予告とセット販売とについて	4
100号 1870年 6月22日	① Hâtime (終刊の辞)	1

東洋文庫和文紀要

東洋學報

第 63 卷 第 3・4 號

論 說

- 清代広東省珠江デルタの図甲制について
——税糧・戸籍・同族——……………片山 剛…… 1
漢時代の絹錢をめぐって……………越智重明……35
義門鄭氏と元末の社会……………檀上 寛……67
中国江南三角州における感潮地域の変遷……………北田英人… 105
チベット史料の年次計算法……………山口瑞鳳… 141

批評と紹介

- 南京大学歴史系元史組編『元史及北方民族史研究集
刊』……………大島立子… 169
中国社会科学院歴史研究所明史研究室編
『中国近八十年明史論著目録』……………山根幸夫… 174
F. ジョルジョン著『トルコ・ナショナリズムの起源に
ついて——ユスフ・アクチュラ(1876—1935)——』……………新井政美… 177

彙 報

- サイモン教授千古……………榎 一雄… 186
第十八回野尻湖クリルタイ……………岡田英弘… 208
第六回東亜アルタイ学会……………岡田英弘… 214
新オスマン人協会刊『自由』紙 (Hürriyet) 目録
——ロンドン, ジュネーヴ (1868—1870)——……………新井政美……01

1982年3月

財団法人 東洋文庫

6

TDV İSAM
Kütüphanesi Arşivi
No 2E.2613

THE TOYO GAKUHO

THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT
OF THE TOYO BUNKO

Vol. 63, Nos. 3,4—March 1982

Articles

Katayama, T.: The *T'u-chia* System 閩甲制 in the Pearl River Delta in Kwangtung Province during the Ch'ing Period: land tax, household register and lineage 1

Ochi, S.: On *Min-ch'ien* 緡錢 in the Han Period.....35

Danjō, H.: The I-mên 義門 Chêng 鄭 Family and Society in the Late Yüan Dynasty.....67

Kitada, H.: The Transition of Tidal Areas in the Chiangnan 江南 Delta of China..... 105

Yamaguchi, Z.: Methods of Chronological Calculation in Tibetan Historical Sources..... 141

Reviews

Yüan shih chi pei fang min tsu shih yen chiu chi kan (Ōshima, R.)..... 169

Chung kuo chin pa shih nien Ming shih lun chu mu lu (Yamane, Y.)..... 174

Georgeon, F.: Aux origines du nationalisme turc, Yusuf Akçura (1876—1935) (Araï, M.)..... 177

Miscellanea

Professor Walter Simon. An Obituary Notice (Enoki, K.)..... 186

The Eighteenth Quriltai (Altaists' Meeting in Japan) (Okada, H.) 208

The Sixth East Asian Altaistic Conference (Okada, H.)..... 214

X + Contents of the *Hürriyet* (Liberty): a Young Ottoman newspaper published in London and Geneva between 1868 and 1870 (Araï, M.).....01

مسترم زياد بک صايغو و سوکيلرم له ...

ISSN 0386-9067

۴ آرای

東洋文庫和文紀要

東洋學報

第 63 卷 第 3・4 號

TDV İSAM
Kütüphanesi Arşivi
No 2E.2613

論 說

- 清代広東省珠江デルタの図甲制について
 ——税糧・戸籍・同族——……………片山 剛…… 1
 漢時代の緡錢をめぐる………越智重明……35
 義門鄭氏と元末の社会……………檀上 寛……67
 中国江南三角州における感潮地域の變遷……………北田英人… 105
 チベット史料の年次計算法……………山口瑞鳳… 141

批評と紹介

- 南京大学歴史系元史組編『元史及北方民族史研究集
 刊』……………大島立子… 169
 中国社会科学院歴史研究所明史研究室編
 『中国近八十年明史論著目録』……………山根幸夫… 174
 F. ジョルジョン著『トルコ・ナショナリズムの起源に
 ついて——ユスフ・アクチュラ(1876—1935)——』……………新井政美… 177

彙 報

- サイモン教授千古……………榎 一雄… 186
 第十八回野尻湖クリルタイ……………岡田英弘… 208
 第六回東亜アルタイ学会……………岡田英弘… 214
 新オスマン人協会刊『自由』紙 (Hürriyet) 目録
 ——ロンドン, ジュネーヴ (1868—1870)——……………新井政美……01

1982年3月

財団法人 東洋文庫

は殆ど完全に収録されているからである。このような便利な目録を作成された、明史研究室の曹貴林氏をはじめとする各位の御努力に対して、心からの敬意を表するものである。又、日本文をも含めた『明代文献目録』について、筆者はかねてから編纂の準備を進めてきたが、その完成を急がねばならぬ、との決意を固めた次第である。

フランソワ・ジョルジュン著

トルコ・ナシヨナリズムの起源について

—— ユスフ・アクチュラ (一八七六

— 一九三五) ——

新井 政美

ユスフ・アクチュラ (Yusuf Akcura) は、トルコ・ナシヨナリズム (トルコ主義 [Turkçilik]) の歴史の中で最も重要な役割を果たした人物のひとつとして知られている。一九〇八年の「トルコ協会」(Turk Derneği) 一九二二年の「トルコの炬燵」(Turk Ocak) の事実上の設立者はアクチュラで

批評と紹介 新井

あったし、また、『トルコ人の母国』(Turk Yurdu) 誌の編輯長として、終始それをリードしていったのもアクチュラであった。しかし、彼のこうした事績にもかかわらず、彼に関する研究が、これまであまりにもおろそかにされてきたことは明白である。トルコ主義のいまひとりの立役者、ズィヤ・ギョカルプについては、玉石入り乱れて、これまでに多くの仕事がなされてきたのに対し、アクチュラに関する研究書として、我々はただトガイ (Muharrem Feyzi Toğay) の著書『ユスフ・アクチュラ、その生涯と著作』(Yusuf Akcura, Hayatı ve Eserleri, İstanbul, 1944) を持っているだけであつた。こうした研究上の大きな空白が、いつかは埋められなければならないのであるが、このほど、その仕事、トルコ人ではなくフランスのトルコ学者によってなされたのである。

本書は、ベニグセン (Alexandre Bennigsen) 教授のもとで研鑽を積んだジョルジュン氏が、パリ第三大学に提出した第三期博士号請求論文に、若干の訂正を施した上で上梓したものである。序文において著者が述べているように、アクチュラは、常にその時々々の現実在即して論説を書き続けていった人物であつた。ために、ギョカルプの『トルコ主義の諸原理』(Turkçülüğün Esasları) にあたるような「系統的・理論的な著作がアクチュラには——「三つの政治路線」(Üç

Tarz-ı Siyaset)を除いて——ない。したがって、アクチュアの評伝を書くには、まず、『トルコ人の母国』誌をはじめとする種々の新聞・雑誌の中から、彼の論文を拾い集める作業から始めなければならない。

本来なら、こうした仕事はトルコ人研究者によってなされるべきものであった。しかし、トルコ共和国においては、そうした基礎的作業がほとんどなされていない。辛うじてギョカルプについては『ヌィヤ・ギョカルプ文献目録』(I. Binarık, N. Seferioğlu, *Ziya Gökalp Bibliyografyası*, Ankara, 1971)が出版されているが、この仕事も、アンカラの国立図書館(Milli Kütüphane)でなされたもので、ギョカルプ研究者の力を結集した共同作業とは言い難いものであった。また、同図書館では、一九七〇年から七一年にかけて、オメル・セイフェッティン(Ömer Seyfedin)、アフメット・ゴクメト(Ahmed Hikmet Müftüoğlu)、フアード・ブローリー(Faık Ali Ozansoy)、アブデョルホンク・ハーミン(Abdülhak Hâmid Tarhan)の文献目録を孔版印刷で出しているが、いずれも不十分なものである。こうした状況の中で、ジョルジョン氏は、アクチュラが寄稿した新聞・雑誌の中から、彼の論文を丹念に拾い集めていった。その際、筆名の問題が大きな障害となったはずであるが、ジョルジョン氏は、文体と内容とを検討することによってそれを乗り越え

えた。ただ、残念ながら、こうした地道な努力の結果作成されたアクチュラの著作目録は、本書では割愛されている。ジョルジョン氏自身が、その目録を完璧なものと思っていないことがその理由であるが、博士号請求論文には付されていた目録が本書で省かれ、アクチュラの用いた筆名のみがあげられているのは、やはり残念なことと思わずにはいられない。しかし、そうした基礎的な作業の上に築かれた本書が、トルコ・ナショナリズムの研究に大きく貢献したことには、寸分の疑いもない。

二

本書は本文と付録とから成る。本文は、第一章「タタール起源の汎トルコ主義(一八七六一一九〇四)」、第二章「汎トルコ主義のための戦い(一九〇五—一九一四)」、第三章「ケマリスト・トルコにおける汎トルコ主義(一九一四—一九三五)」の三章に分けられている。表題だけを見ると、汎トルコ主義が前面に押し出されているかのようだが、実際は、表題の後につけられた各年代におけるアクチュラの思想、行動に沿って書き進められていて、これは、あくまでアクチュラの評伝である。付録では、アクチュラの論説十篇と書簡ひとつとがフランス語に訳されている。さらに、一九一六年に、スイスで、アクチュラと共にレーニンに会見したア

ズィズ・メケル(Aziz Meker)の報告やマクチュラの似顔絵も付されている。訳出された論説は以下の通りである。「三〇の政治路線(一九〇四年)」。なお、この論説は全訳されているが、他のものはすべて抄訳である。「メドレーの改革」(“Medreselerin islahı,” *Sirat-ı Müstakim*, IV/79, 1910)。「ホルトガルの革命(トヤヤ)」(“Portekiz ihlâkı minasebetyle,” *Sirat-ı Müstakim*, V/III, 1910)。「中央アジア難民のための講演」(“Asya-yı vusata felaketzedegâni menfatine konferans,” *Sirat-ı Müstakim*, V/128, 1911)。「革命の兆」(“Alâim-i inkâlâb,” *Sirat-ı Müstakim*, V/112, 1910)。「トルコ人世界」(“Türkiâk,” *Sahame-i Serret-i Fânân*, 1912)。「覚え書き」(“Kıtgük muhıra,” *Türk Yurdu*, IV/23, 1913)。「一九一九年のトルコ人世界」(“1329 Türk dünyası,” *Türk Yurdu*, VI/3, 1914)。「経済政策」(“İktisadi siyaset hakkında,” *Türk Yurdu*, XII/12, 1917)。「同盟」(“İttifakı dair,” *Siyaset ve İktisad*, 1924)。「トルコ・キョカルプ」(“Ziya Gökalp,” *Türk Yurdu*, I/4, 1924)。

以上、以下簡単に本文の内容を紹介してゆくことにする。まず、第一章では、十九世紀後半におけるトルキスタンとオスマン帝国との状況が概観された上で、アクチュラの生い立ちが描かれる。富裕なタタール人ブルジョアの子として生ま

れたアクチュラは、露土関係悪化によるロシア・ムスリムのオスマン帝国移住の波の中、家業の不振によって一八三三年、母親とともにイスタンブルへ移った。その後ロシアへ旅する機会もったことが、彼にナンヨナリストとなる素地を与えたという記述は、トガイのそれと一致する。アクサライに落ち着いて、小学校を卒業してから、アクチュラは、陸軍幼年学校を経て士官学校、さらに陸軍大学へと進学する。文官学校やガラタサライ・リセなどがコスモポリタンを養成していたのに対し、士官学校は、軍医学校とともに、愛国者の搖籃であった。アクチュラも、その反専制志向により、一八九六年に捕えられ、翌九七年にはトリポリの監獄に入れられた。九八年の恩赦後もトリポリに勤務し続けた彼は、一八九九年、そこを脱出してパリへ出ることに成功した。政治学学校(Ecole des sciences politiques)で学びながら、アクチュラは、アフメット・ルザ、アブドゥッラ・ジュヴェトラ、青年トルコ人運動の指導者たちと交わり、『議会』(Meşveret)、『共同体会議』(Sura-yı Ümmet)とつづいた、彼らの新聞にも寄稿した。

ここまで書き進めてきた後、著者は、成長過程にあったアクチュラに与えられた様々な知的刺激にも触れ、そして、そうしたものから多くのことを吸収してロシアへ帰ったアクチュラが、いわば、それまでの研鑽の総決算として一九〇四年

に発表した論説「三つの政治路線」の検討を行なう。アクチュラへの知的刺戟としては、まず第一に、ロシア・ムスリムによるジャヤディード(改革)の運動、そして特にイスマイル・ガスプリンスキーの『翻訳者』(Tercüman)紙があげられる。また、ヨーロッパにおけるトルコ学の成果も忘れることができない。さらに、彼がパリで学んだヨーロッパの社会思想の中には、ダーウィンやスペンサーとともにマルクスも含まれていたという事実も、また、重要な指摘であろう。

さて、「三つの政治路線」であるが、著者は付録にその全訳をつけているため、内容そのものよりも、むしろ、その背後にあるアクチュラの思考の分析に、より重点をおいているように見える。オスマン主義、イスラム主義、トルコ主義のうちどれがオスマン国家に力と進歩の原動力とを与えることができるか、というのがこの論説の主題であった。「力と進歩」(Kuvvet ve terakki)は、「統一と進歩」(Birlik ve terakki)へのアンチ・テーゼでもある。つまり、この論説は青年トルコ人たちにあてた批判でもあったのである。アクチュラによれば、彼らの政治的な見通しは曖昧すぎるのであった。また、彼らの求める憲法復活＝専制政治廃止という古典的なスローガンは、もはやオスマン国家再建のための有効な力たりえない、というのであった。したがって、アクチュラのこの論説には、「憲政」(meşrutiyet)という単語も一度と

てしまふ。検閲が再び強化されるとアクチュラは、ロシアからヨーロッパ、さらにエジプトと旅し、ガスプリンスキーのいるクリミアへ立ち寄った後、一九〇八年十一月に、青年トルコ人革命以後、より自由な活動が可能となっていたイスタンブルへ移っていった。

アクチュラを中心として展開されたオスマン帝国におけるナショナリズムの運動に、三つの源流があると著者は言う。つまり、ネジブ・アースム、メフメット・エミンら、アブデウルハミト時代からの民族主義的歴史家・文学者たちがそのひとつ。第二は、青年トルコ人たちと強く結びついた、『若いペン』(Genç Kalemler)誌に拠る人々。そして最後が、アクチュラらのロシアからの人々である。この指摘は極めて適切かつ正当である。そして著者は、このうちの第三の流れを追おうとするのである。

一九一一年、それまでしばしば寄稿していた『真正正道』(Sırat-ı Müstakim)誌が汎イスラム的傾向を強めると、アクチュラはそれを見捨てて、『トルコ人の母国』誌を創刊する。これは、トルコ人の一体化、トルコ語の簡略化と統一、教育の近代化、女性の解放などをうたい、また、ガスプリンスキーの『翻訳者』の影響を強く受けていた雑誌である。この中で、ロシアからのトルコ人と、オスマン帝国出身のトルコ人とが共同で、ナショナリズムを広めるべく努力してゆく

して使われていないのである。帝国内における自由とか、帝国の統一とかいうレベルでの議論を、現実にははかるに追い越しているというのが、アクチュラの認識であった。また、アクチュラはこの論説で、ナショナリズムを、イスラムの束縛から離れた所で主張していた。例えば「民族」を表わすにも“cins”や“kavim”といった言葉の代りに“ilk”が用いられていたし、さらに、ナショナリズムを正当化するにも、後に多くのナショナリストがしたように、コーランやハディースの解釈の仕方によって、それがイスラムに反していないと主張しようとするのではなく、彼は、ナショナリズムを、歴史の必然として認めようとしていたのである。

第二章においては、一九〇五年から一四年頃までのアクチュラの動きが述べられ、また、彼の歴史観、社会観などが検討される。一九〇三年からカザンのムハンメディエ・メドレゼで歴史、地理などを講じていたアクチュラは、ロシアの一九〇五年革命以後、活発に動き始める。『カザンの報道者』(Kazan Muhabiri)『時』(Vakit)という新聞での執筆活動に加え、ロシア・ムスリム同盟(Rusya Müslümanlarını ittifakı)の中心人物として多彩な政治活動を展開したのである。ドゥーマの選挙に際しては立憲民主党(カデット)との協力を説き、後にはその中央委員にもなるが、トルコ人世界の擁護を図る彼の運動も、結局ツァーリズムにおさえ込まれ

のであるが、著者は、アクチュラとオスマン・トルコ人との間には、何らかの不協和音が存在していたのではないかと述べる。ギョカルプが一九一四年以降、『トルコ人の母国』への寄稿をやめて『社会学雑誌』(İctimaiyat Mecmuası)『新雑誌』(Yeni Mecma)を創刊したことなどが、その証拠としてあげられるが、著者は、彼らの間の「不和」については何を言っても想像の域を出ないとして、それ以上の追求は控えている。

さて、ロシア及びイスタンブルでのアクチュラの活動を描いた後、著者は、彼の歴史観に触れる。アクチュラは、カザンのムハンメディエ・メドレゼで歴史を講じたのを皮切りに、一九一二年から一年ほどイスタンブル大学で政治史の授業を受けもち、また共和国成立後は、再びイスタンブル大学で現代史の講義を行なった。また一九一一年には、トルコ歴史学研究協会(Türk Tarih Tedkik Cemiyeti)の総裁に任じられている。こうした経歴にもかかわらず、アクチュラの歴史家としての仕事自体には、独創的なものではなく、したがって、今日彼の著作に学問的な意義を見出す歴史家もいない。しかし、アクチュラが西欧の歴史哲学との接触によって「歴史の進歩」の観念を学んだこと、及び、彼がトルコ民族史の研究と、その結果明らかにされるはずのトルコ人の輝かしい過去とを、トルコ人の一体化を実現するためのテコにしよう

としていたことが指摘される。

次に著者は、社会変革に関するアクチュエラの考えに照明をあてる。アクチュエラはパリ滞在中から社会改革の必要性を説いており、単に憲法復活を望んでいた青年トルコ人たちは、一歩先んじていたと言いうことができる。社会の変革は、その社会を形成する個人の変革と関わってくる。したがって、それは教育の問題と緊密につながっているのである。アクチュエラは、オスマン帝国における知的伝統がスコラの硬直したものであると批判し、人間を、あらゆる超越的存在、偏見、教条主義から解放しなければならぬとした。さらにアクチュエラは、内面の問題のみに留まらず、社会構造の変革にも考えをめぐらせる。オスマン・トルコ人が、一般に、階級の觀念を受け入れなかったのに対し、アクチュエラは、タター、ロシア、そして西欧の社会を實現していたために、階級及び階級闘争についての理解をもっていた。しかし、彼はタター人の社会主義運動には批判的である。それが階級間の利害の不一致を強調するあまり、ロシア・ムスリムの団結を損っていると考えたからである。一方、オスマン帝国においては、一九一九年以前において社会主義は重要な政治勢力とは言い難かった。しかしアクチュエラは、それが、ギリシア人、アルメニア人等の外国人資本家を攻撃することで、トルコ人に利益をもたらすと考えて、それを利用しようとした。

を引き上げるのが、さしあたっての目標となった。

第三章では、ロシア・ムスリムとの連帯、一体的なトルコ人世界形成のためにアクチュエラが行なった対外宣伝活動について述べられるが、その前にまず、彼の国際関係認識のありようが明らかにされる。アクチュエラの国際関係分析には、ふたつの歴史的対立関係が軸にすえられている。ひとつは、トルコ民族とスラヴ民族との対立である。トルコ人のスラヴ世界への侵入と、キプチャク汗国崩壊後の勢力逆転、つまり、スラヴ民族によるトルコ民族圧迫とである。こうした認識は、必然的に、ロシアと汎スラヴ主義とを敵とみなす考え方を導き出す。第二の対立関係は、オスマン帝国を含むイスラムのヨーロッパ侵入と、これにたいするヨーロッパ勢力の反撃とである。その対立は、アクチュエラの時代には、帝国主義のオスマン帝国侵略という形をとっていた。これはつまり、西欧帝国主義を敵とみなす考え方である。ロシアとの敵対関係は別として、西欧諸国について見ると、オスマン帝国には伝統的な親仏感情が存在していた。アクチュエラは、この時期におけるフランスのロシアへの接近をあげて、フランスとの連帯が神話にすぎないと断じる。さらに、イギリスもロシアへ接近してしまっていた。残ったのはドイツである。アクチュエラは一九一〇年に、早くも、ドイツがオスマン帝国に対して領土的な野心を持っていないことを説いている。さらに、

『トルコ人の母国』誌に一時、社会主義者バルウスを招いたのもそのためであった。また、ヨーロッパにおける社会主義運動についても、それが帝国主義を打倒しようという観点から、好意的な態度を示していた。

一方、オスマン社会の分析に際しては、アクチュエラは、ここでトルコ人ブルジョアジーの不在を嘆き、そしてその育成を主張する。タタール人のナショナリズムを見て、また十九世紀におけるヨーロッパの国民国家形成を見ても、近代国家建設におけるブルジョアジーの歴史的役割は明らかであるというのであった。オスマン帝国にそうした階級を創り出すためには、まず、商工業を蔑視するような偏見を打破することが必要であるとして、アクチュエラは、『トルコ人の母国』の経済欄に力を入れ、また、商業で成功したロシアのトルコ人の話も掲載するように努めた。また彼は、それがオスマン帝国の経済を破壊するとして、自由主義経済を排し、保護貿易主義をとるリストの経済学説を支持していた。

アクチュエラがこうしてオスマン社会の変革について述べる時、常にそのモデルとして考えられていたのが、タタール社会であった。彼によれば、タタール人の社会は、教育水準、宗教心、トルコ史への関心、さらに社会的、経済的な面など、いかなる観点から見ても、オスマン社会より進歩しているのであった。したがって、そのレベルにまでオスマン社会経済政策におけるドイツの影響もある。こうして、オスマン帝国が同盟しうる国としてドイツが選ばれることになった。そして、一九一三年以降、「統一と進歩」独裁政権が親独政策をとる際にも、アクチュエラの影響力が働いていたことが、著者によって明らかにされる。

一九一五年からブダペスト、ベルリン、ローザンヌなどを回ってトルコ人世界の防衛と一体性を説いたアクチュエラであったが、オスマン軍の敗北により、その努力も実ることなく終った。連合軍のイスタンブル占領後、アクチュエラは抵抗運動に参加してゆくことになる。一九一九年の「民族トルコ党」(Millet Turk Firkası)設立、抗議集会への参加などの後、彼は一九二一年に、アンカラでムスタファ・ケマルの運動に合流する。解放戦争中は、ケマルの信任を得て、特にその対ソ政策に重要な役割を果たした。その後、一九二五年まで、アクチュエラはケマルの新国家建設事業に積極的に参与していった。しかし、クルド人の反乱を機に政府内での知識人の地位が低下すると、彼は教育の仕事に専念することになった。ケマルの建設してゆく国家は、決してアクチュエラの望んだものと一致していたわけではなかったが、彼はロシアへは戻らず、終生共和国ですごしたのである。

三

トルコ・ナシヨナリズムの歴史の中で、ズイヤ・ギョカルプに比肩するほどの重要な役割を演じながら今まで忘れられてきたユスフ・アクチュラについて、これだけの体系的な分析をなしたげたジョルジョン氏の努力に対して、われわれは、まず、深い敬意を表さねばなるまい。そして、氏の仕事を踏み台として、今後、この分野における研究が一層深化されてゆくことが期待される。最後に、すでに本書の中に認めることができる、そうした今後の発展への芽と、それが持つ問題点とについて簡単に述べて、この紹介をおわりたいと思う。

これまで、ギョカルプひとりがあまりにも脚光を浴びてきたこともあってか、ジョルジョン氏は、本書のあちこちでアクチュラとギョカルプとの差を強調しようとしている。こうした視点には評者も大いに共鳴するし、また、今後の方向として、それが正しいと確信するものでもある。この点に関しても、本書は評価されねばなるまい。しかし、残念ながら、本書では、そうした著者の意気込みが、多くの場合、空転してしまっているように思えてならないのである。例えば、アクチュラと「統一と進歩」との関係について述べる時、ジョルジョン氏は、ギョカルプとちがってアクチュラがそれとの間

公正でないと言われても、いたしかたあるまい。正直言って、アクチュラと比較されるために、しばしば引き合いに出されるギョカルプが気の毒に思えたことが少なからずあったことも、ここで申し添えておきたい。

さらに「三つの政治路線」の分析に際しては、アクチュラ達ロシア出身のナシヨナリストにはトゥラニズムの傾向がなく、トルコ・ナシヨナリズムのそうしたロマン主義的傾向は、ギョカルプらのオスマン・トルコ人に強いと、ジョルジョン氏は書いている(二九—三〇頁)。しかし、アクチュラがトルコ人の統一を願う、その実現のために努力していたことは明らかである。トゥラニズムか否か。あるいは、どこまでが「トルコ」でどこまでが「トゥラン」か、といった議論は不毛ではあるまいか。どぎらもナシヨナリズムである。トルコ民族としての自覚を持ち、一定の社会階層によって担われたナシヨナリズムの歴史が古いものか否か。さらに、己の依

に距離をおいていたと説き、さらにその政策にも批判的であったと書いている(四一頁)。しかし、三頭独裁期の「統一と進歩」が親独政策をとった際、そこにアクチュラの影響力が介在していたことを明らかにしたのも、ほかならぬ著者自身であった(七八頁)。

また、ジョルジョン氏は、アクチュラがタタール社会をオスマン社会の改革のモデルとしていたことを説明する際に、彼が、タタール社会をオスマンのそれよりも、よりトルコの、イスラム的、近代的であると考えていたと述べ、そうした現実的な目標に向かってアクチュラが努力しようとしていたのに対し、ギョカルプの「トルコ化、イスラム化、近代化」(Türkleşmek, İslamlaşmak, Müasırlaşmak)では、単に、文化を持つ民衆と文明をもつ知識人との交流という、より觀念的な主張が展開されていると言っている(六三頁)。しかし、要は比較のしかたである。アクチュラ自身も、知識人が民衆の生活の場において交流することを望んでいたのであるし(六七頁)、民衆を重視することをナシヨナリズムと結びつけているという点において、両者に窮極的なちがいがあるとは言い難いように思える。ひと口に「トルコ化、イスラム化、近代化」と言っても、ギョカルプは、この表題で八篇の論説を『トルコ人の母国』誌に連載しており、その内容も多岐にわたっている。ジョルジョン氏のこの比較のしかたが

って立つべき国家を持っていたか否かが、むしろ本質的な問題ではないかと、評者には思えてならない。こうした見通しについては以前簡単に述べたことがあるが(『青年トルコ』革命以前におけるナシヨナリストの動向、『史学雑誌』八九—一一)、ジョルジョン氏も、ツァーリズム国家とオスマン国家とに住むトルコ人の条件の差について触れている(六八頁)。この方向で押してゆけば、また新たな眺望が開けてくるのではあるまいか。本書は、アクチュラの評伝であるために、あえてそこまでは書き進まなかったようにも思われるが、とまれ、今後のジョルジョン氏の研究の発展が楽しみであり、また恐ろしくもあるような、本書の出現ではある。

François Geogron, *Aux origines du nationalisme turc, Yusuf Akçura (1876—1935)*, Éditions A.D.P. F., Paris, 1980. 154p.